■Ⅰ章

研究結果の概要と提言

お茶の水女子大学教授
無藤　隆

1．研究テーマ～自立した学習者の形成に向けて～

◆自立した学習者の形成期～小学校高学年から中学生という時期の重要性～

小学校高学年及び中学校１・２年生の段階は、学習への態度や技能・習慣を形成する上で重要な時期である。おそらくその時期を外すと、後になって勉学の自主的な習慣を形成することは、本人のよほどの自覚と努力がないと困難になる。その上、そのことは単に習慣だけの問題ではない。もっと大切なことは学習することがどのようなことなのか、特に自らの成長にとってどのような意味を持つかの認識がその時期に形成されるということである。勉強について、それ自体が楽しいとか、自分の成長のために行うのか、それとも、成績やほめられたいから行うのか、といった捉え方の違いはその後の勉学態度に強い影響をもたらす。

そういった習慣・態度・技能・学習観はある年齢になると、大体の子どもがほぼ確実に習得するといった事柄であるというよりも、個人差が大きいことである。しかも、そういったものは１つを習得すれば後を自ずとすべて獲得できるというものではない。成績がよく勉学の習慣がついていたとしても、学習観はむしろ成績中心だったりすることはよくみられることであろう。

◆自立した学習者とは～学習習慣・学習観・自己制御する力の習得～

だがまた、勉学は理念だけわかっていても進められるわけではない。実際に日々実行できねばならない。そのためには、自己を制御して学習に振り向けていく技能が必要になる。単に親や教師やさらには塾等に頼るだけではいけない。もちろん、そのような外部の援助手段としての人的資源を利用できるのは大事なことである。だが、自立した学習者になるためには、さらに進んで、そういった人的資源に全面的に頼るのではなく、時に一人で学び、時に友だちから学び、また参考書を使う等の多様な資源を活用できることが大切になる。特に、勉強は常にそれ自体が面白いというわけにはいかず、単調なときも、辛いけれど頑張るしかないときもある。逆に、それ自体をよく考えるとわかっていく楽しさを得られるときもある。そういった多様な事態に対処できねばならない。

◆研究主題～自立した学習者を育む人・物的学習環境のあり方～

幸い、こういった習慣や態度・技能等は教育可能なことである。親や教師やその他の子どもに関わる人々が子どもが自ら学ぶことを大切に思い、そのための環境を整えていけば、自立的な学習者に育っていく。では、どういう条件があれば、自立していくのであろうか。成績だけを追い求めるのではない、学習者になっていくのであろうか。これが、本研究で掲げた研究主題である。

2．結果概要～主な研究結果をめぐって～

◆在宅学習の実態把握の重要性

本研究の焦点は、自宅での学習の様子にある。もし学習者として自立しているならば、様々な学習資源（人や物的環境）を利用しながら、自分なりの面白さを追求する子どもの姿が現れるはずである。あるいは、親や塾などに頼りきりで成績さえよければよいという子どもの姿や、逆に、まったく学習というものを放棄して、学校や勉強からはいっさい無縁で過ごそうとする学習に対する無気力を抱えた子どももいるのかもしれない。全体の平均のみならず、そういった各々の層がどの程度いて、どのような生活を行っているのかを取り出すことが重要になる。

◆子どもの学習を支える人的環境～小学生は親、中学生は多様化～

まず、どの程度子どもが家庭で勉強しているのであろうか。小学生は宿題を１日せいぜい１時間程度であるが、中学生は宿題の割合が減り、個人差が大きくなる。塾や通信教育等の民間教育機関の利用は小学生で７割、中学生で８割に達する。また、わからないときなどに助けてもらう相手として、親が小・中学生共に大きいのに対して（中学生でその率は下がる）、特に中学生で塾や級友の割合が上がる。小学生は親との人間関係を支えとして勉強を進めるのに対して、中学生の相談相手は広がっている。また、民間教育機関の利用はすでに多くの子どもにとって日常のものとなっている。

◆学習意欲・行動に強い影響を与える「学習観」～小・中学生の意識差～

また、小学生と中学生について、学習環境の利用や制御の様子を比較すると、小学生の方が多種類の情報資源を用いる傾向がある。物理的環境については、共に多様な工夫がみられる。中学生は実際に自分の勉強に役立つかどうかの判断が効いてくるようである。

学習観については、理解等の学習目標志向性は小学生に高く、他の人より能力が高いことを示したい遂行目標志向性は中学生の方が高い傾向がある。また、小学生の方が勉強に対して楽しいと思う意識が強い。中学生で有能感や自尊心が低下する。これらは中学生の時期の発達的に深刻な事情がうかがえるが、同時に、中学生の現実的にならざるを得ない状況を反映しているものでもあろう。また、学習環境を積極的に整え、必要な情報を求める態度は、学習を理解の喜びから捉える傾向の子どもに強いことがみられた。学習意欲などでも学習観の影響は強い。

なお、塾や通信教育を受けていることがそのまま成績志向を強めているのではない。特に塾通いについてそのような場合がみられるが、そういった学校の宿題以外の勉強をしている方が勉強を楽しいとか、理解したいと思っている場合も多いし、勉強に対する態度も積極的だからである。

一部の子どもたちは勉強に対して消極的である。まわりから助けてもらわず、学習への意欲が低い。学習へのまわりからの援助が乏しいことが影響している可能性がある。

◆自立的な学習者育成のために～「理解」を目的とした学習観の重要性と親の関わり方の影響～

以上から、学習を理解への喜びから捉える見方を持つことが自主的学習を形成する上で重要であることがわかる。小学生から中学生にかけて学習に対する学習環境の自立的な利用は増えるが、積極的肯定的な態度や学習観が低下すること、塾・通信教育が必ずしもそういったことにマイナスではないが一部にマイナスのある可能性があることなどがわかる。また、全般的に親がどう関わるかが影響することが認められる。また、親の関わりが乏しく、塾・通信教育とも無縁な層で、勉強を放棄しつつある子どもがいることが推察できる。

3．提言～研究結果の意義をめぐって～

本研究から、学校や親また教育関係者にとっての意義を以下の６点に整理したい。

1）塾や通信教育がすでに多数の子どもの日常的な学習支援の一端を担うようになっている現状に対して、肯定するにせよ、否定するにせよ、その現にある働きを誰がいかにして担うのかを考えなければならない。

2）小学生に対して自立的勉強の技能を指導することを一層進める必要がある。それは「自己学習力」と呼ばれるものを発展させ、子どもの家庭学習を含めてのことである。

3）特に中学生に対して、勉強の楽しさや広がりを感じられるような手だてが望まれる。

4）親の子どもへの関わり方の教育を考える必要がある。

5）学校の勉強に対する意欲が低下している子どもへの対応は、まさに学校の行うべきことである。だが同時に、家庭その他での多方面からの援助が望まれる。

6）根本的には、学習は「わかる楽しさ」によって進められるべきものである。受験や成績の目的を否定するには及ばないが、同時に「わかる楽しさ」を知り、追究するやりがいを感じとり、学習活動がその意味でも面白いのだと感じられるような体験を拡充することが最も根本にある課題である。